

多様な人材と テクノロジーで築く 安全・安心なまち

神戸市消防局長 上 山 繁



神戸市は、六甲山系と瀬戸内海に囲まれ、風光明媚な港町として発展してきました。阪神・淡路大震災では壊滅的な被害を受け、災害に強いまちづくりを着実に進めてきましたが、震災から31年が経過した今、神戸のまちは大きな変革期を迎えています。

神戸の玄関口である都心・三宮では、(仮称)JR三ノ宮新駅ビルの開発や西日本最大級となる中長距離バスターミナルを中心とした再整備、ホテル、オフィス、商業施設等の民間機能が併設される市役所2号館の建て替えなど、神戸全体の活性化と国際競争力の向上に向けた重要な取り組みが進められています。ウォーターフロントでは、最大1万人が収容できる多目的アリーナである、「ジーライオンアリーナ神戸」が2025年に完成するなど再開発が進んでおり、開港20周年を迎えた神戸空港においても、2030年4月の国際定期便就航を目指し、引き続き機能強化の検討が進められています。

神戸市消防局では、こうしたまちの発展と多様化する災害リスクに対応するため、「幅広い人材とテクノロジーを活用した災害対応力の強化」を柱に取り組みを進めています。

どれだけテクノロジーが進展しても、人を救うのは「人」です。そこで、どのように時代が変化しても、柔軟に対応できる人材の育成に最も力を入れています。まずは災害対応能力の向上です。近年、全国各地で地震や大規模火災が発生するなど、災害の様相は激甚化・頻発化しています。このような災害に対応できるよう、実践的な訓練施設の整備を進めているところです。区画火災を想定したコンテナ内部でパレットを燃焼させ、火災の性状変化、火災現場と同様の熱・煙、注水による熱気、環境の変化を体験できる実火災体験型訓練施設を2025年に整備しました。今年度は、大量の土砂に埋もれた要救助者救出手法に関する実践的な訓練ができる風水害対応訓練施設、ガレキや倒壊家屋からの要救助者救出手法に関する実践的な訓練ができる震災対応訓練施設を整備してまいります。

次に、神戸市では全庁的に一定のデジタルスキルを有する「DX推進リーダー」の養成を進めていることから、消防局でもデジタル人材の育成に努め、消防団員の保有装備品の管理システムを構築するなど、デジタルツールの開発、導入によるBPR（業務改革）に取り組んでいます。

また、災害対応の迅速化や職員リソースの最適化に向け、テクノロジー導入を積極的に進めています。市内全消防署にドローンを配置するとともに操縦資格者の養成をすすめ、災害初期に上空から被害状況を把握することで、部隊投入や活動方針の決断の迅速化に努めています。

救急活動では、マイナ救急や新たに導入した救急情報システムの運用により、医療機関との情報共有を円滑化し、救急隊員の負担軽減と活動の効率化を推進しています。

阪神・淡路大震災は、日本の防災・減災対策や消防防災体制の在り方に大きな教訓を残しました。その教訓を次世代へ確実に継承するとともに、DXや新たな技術を積極的に取り入れながら、市民、地域、関係機関の皆様と力を合わせ、災害に強く、安全で安心なまち神戸の実現を目指してまいります。